

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 支那古代の詩變を論ず : 論説 |
| Author(s) | 長尾, 槇太郎 |
| Citation | 龍南會雜誌, 6 2 : 1 - 2 3 |
| Issue date | 1897-12-27 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4984 |
| Right | |

龍南會雜談第六拾貳號

論 說

支那古代の詩變を論ず

教授 長尾 楨太郎

叙 説

詩變豈言ひ易からんや、擊壤康衢尙矣と雖も、猶は端を義實に發す、而して書契以前は邈焉たり、何を以て信を致んや、夫れ詩は志を言ひ、歌は言を承ふす、大舜の析義するところ、既に炳焉とし、て其れ明かなり、芻言輿誦田畯紅女の歌謠皆詩ならざるはなし、書契以前のことは得て知る能はずと雖も、既に人あれば斯に志あり、志あれば斯に言あり、而して言を承ふするものは即ち詩なり、書契以前と雖も豈必しも全く詩なしと謂ふべけんや、蓋し之れ有らん、聞くことを得ざるのみ、今に於て其一二を傳ふるものなきにあらずと雖も、遼焉邈焉姑らく其舊傳に従はんのみ、四始六情其義明かなり、五言七言其章成る、詩詞騷賦其牀備はるど雖も、文辭始めて成りて斯に格律生ず、格律生じて斯に牀制整ふ、故に義實の詩に格律を論し、唐虞の歌謠に體制を議する、抑亦愚たるのみ、古の所謂詩なるものは口に歌詠するところ、之を文字に藉て傳ふるのみ、芻夫輿人田畯紅女豈盡とく文字を知らんや、君子其歌詠するところを聞て之を文字に著はすのみ後世の如く文人騷士専門の學者文字を馳騁し章句を羅織して以て巧妙を矜夸するの類にあらざるなり、故に吾私かに以意らく、詩の興るは文字より舊るし、文字、成るに及んで始めて古詩を傳ふるを得るのみ、文章の如きは文

字以後の開發にして文字なければ文章なし、詩の如く口頭の歌詠にて而て可なるものにあらず、文章も亦固より思想言語より基つきて成ると雖も、思想言語の境界内に在りては竟に是れ思想言語たるのみ、未だ直ちに之を以て文章なりと謂ふべからざるなり、其文字章句を構成するに及んで、斯に始めて文章の目生ず、故に書契以前に文章なし、支那の文學に於て最舊なるものは詩より舊るきものは之れ有らざるなり、

詩の興るや甚だ舊るし、而して其脉を成すも亦初めより定律あることなし、之を言はんと欲するところ、之を口に發して永言し、自つから節奏を成すものにして長短疾徐緩急卷舒自如たるなり、後世の如く一句を詠し一首を賦せんとすれば、先づ格律體制を考へ、一定の準繩に羈束せらるゝものにあらざるなり、而て後世の所謂格律體制は盡とく端を此に發するなり、特に後世に至りて創意開造せしにはあらざるなり、是を以て古の詩を知らざれば以て後の詩を語るべからざるなり、徒らに文字に臨んで彫繪刻鑿を是れ事とし、以て辞藻家の能事畢れりと爲すは、殆んど其寡短を笑はれんのみ、

詩は志なり、志の之くところなりとは、毛詩序に示すところの定義なり、然り固より詩は志の之くところに外ならずと雖も、三皇五帝三代以前の詩は單に志の之くところのみにて詩を作爲するを得べきなれども、一種の文學とて藹葩を擗摘し辞章を陶鑄するに至りては、腹笥便々萬卷を藏し五經を諳んするにあらずんば之を能くすべからざるなり、夫れ『思無邪』の語は詩三百篇を蔽ひ、溫柔敦厚の旨を失はず、思ひ邪なきが故に興觀群怨之を聞て以て風を觀るべく、之を采て以て俗を察すべし、溫柔敦厚なるが故に美に順ひ惡を匡す、亦唯だ性情の正辭氣の眞なるを以てのみ、後世の詩

は辞章の上に於ては巧妙に詣れるも、綺縠に造れるも、性情の正辞氣の眞を去ること益す遠く、延陵の季子今に出づるありと雖も、復た何を以て風を觀んや、采詩官ありと雖も復た何を以て俗を察せんや、劉勰曰く「黃唐淳而質。虞夏質而辨。商周麗而雅。楚漢侈而艷。魏晉淺而綺。宋初訛而新。從質及訛。彌近彌淡。何則競今疎古。風味氣衰也。今才穎之士。刻意學文。多略漢篇。師範宋集。雖古今備閱。然近附而遠疎矣。夫青生於籃。絳生於箔。雖踰本色。不能復化。桓君山云。予見新進麗文。美而無采。及見劉楊言辭。常輒有得。此其驗也。故練青濯錦。必歸藍倩。矯訛翻淺。還宗經誥。斯斟酌平質文之間。而隱括乎雅俗之際。可與言通變矣」とは知言なるかな劉勰は梁人なり梁の時に亦既に此言あり矧んや後世風降り氣薄く益す淺而綺訛而新に流れ巧佞浮靡を窮極す劉勰をして今日に在らしめば復た之を何と可言はん、

然りと雖も結繩の政は以て乱秦の緒を治むべからず、繁文華縟を夸尚するは後世の風氣之をして然らしむるのみ蓋し亦已むを得ざるところなるか、今に於て黃唐の詩を追ひ、虞夏の章を望むも、天下復た羲皇氏の民たるべからざるを奈何せん、葛天氏の民たるべからざるを奈何せん、古今の風氣は代を追ふて開け、世を趁ふて進む、故に新を求め奇を務むるは自然の趨向に従ふて而えて可ならざることなきなるのみ、然れども今の詩は古の田畯紅女の辭にあらす、藹夫輿人の語にあらす、苟も文字を知れる文人學士の辭藻なりとすれば、少なくとも辭氣を出して斯に鄙俗に遠ざかるの注意なかるべからず、學者として其品位を傷り、士君子として其面目を亡ふが如きは慎みて之を避けざるべからず、又之を防がざるべからず、然らずんば優倡侏儒が卑猥狎褻の言と奚を以て擇ばんや、奚を以て別がたんや、文華綺靡が君子の言にあらすと云ふにはあらす、美人香草が溫柔敦厚にあら

す。云ふにもあらず、桑中湊泊は葩經亦之を收じ、唯其性情如何と顧るのみ、劉勰又曰く「夫鉛黛所以飾容。而盼倩生於淑姿。文采所以飾言。而辨麗本於情性。故情者文之經。辞者理之緯。經正而後緯成。理定而後辞暢。此立文之本源也。昔詩人什編。爲情而造文。辞人賦頌。爲文而造情。何以明其然。蓋風雅之興。志思蓄憤。而吟詠情性。以諷其上。此爲情而造文也。諸子之徒。心非辭陶。苟馳夸飾。鬻聲釣世。此爲文而造情也。故爲情者。要約而寫眞。爲文者。淫麗而煩濫。而後之作。採濫忽眞。遠棄風雅。近師辭賦。故體情之製日疎。逐文之篇愈盛。故有志深軒冕。而汎詠皇壤。心纏賤務。而虛述人外。眞宰弗存。翻其反矣。夫桃李不言而成蹊。有實存也。男子樹蘭而不芳。無其情也。夫以草木之微。依情待實。況乎文章述志爲本。言與志反。文豈足徵。是以聯辭結采。將欲明理。采濫辭詭。則心理愈窮。固知翠綸挂餌。反所以失魚。言隱榮華。殆謂此也。是以衣錦褰衣。惡文章太章。賁象窮白。貴乎反本。夫能設謨以位理。擬地以置心。心定而後結音。理正而後構藻。使文不滅眞。博不溺心。正采耀乎朱藍。間色屏於紅紫。乃可謂離琢其章。彬々君子矣。總が言實に先づ我心を獲たり、夫れ詩に尙とぶところのものは情のみ、文以て之を行ふ所以なり、文のみ、情以て之を貫する所以なり、情文兼備はるものにあらずんば、豈能く人を驚かすに足らんや、況んや鬼神を泣かえむるに於てをや、性情の正ならざるものは文なりと雖も何か爲ん、辞氣の眞ならざるものは藻なりと雖も何か爲ん、優孟の衣冠は辞章に於て取らざるところなり、鸚鵡の能言、猩猩の善笑は、之を如何せん、之を如何せん、

且つ夫れ詩の用たるは猶ほ史の如きなり、史は一代の事を言ひ、直にきて隠くすことなく、詩は一代の政を繫ぎ、婉にして章を成す、是れを以て孔叢子に曰く、『孔子讀詩及少雅。喟此而嘆曰。吾

於_二周南召南_一。見_二周道之所_一。以盛也。于_二柏舟_一。見_二匹婦執志之不可易也_一。于_二淇漁_一。見_二學之可以爲_二君子也_一。于_二考槃_一。見_二遁世之士而不悶也_一。于_二木瓜_一。見_二包且之禮行也_一。於_二淄衣_一。見_二好賢之心至也_一。於_二鷄鳴_一。見_二古之君子不忘其敬也_一。於_二伐檀_一。見_二賢者先事後食也_一。於_二蟋蟀_一。見_二陶唐儉德之大也_一。於_二七月_一。見_二豳公之所_一以造_二周也_一。于_二東山_一。見_二周公之先_一公而後_二私也_一。於_二狼跋_一。見_二周公之遠志所以爲_二聖也_一。于_二鹿鳴_一。見_二君臣之有_二禮也_一。于_二彤弓_一。見_二有_二功之必報也_一。於_二羔羊_一。見_二善政之有_二應也_一。於_二節南山_一。見_二忠臣之憂_二心也_一。於_二蓼莪_一。見_二孝子之思_二養也_一。於_二四月_一。見_二孝子之思_二祭也_一。於_二裳々者華_一。見_二古之賢者世保_二其祿也_一。於_二采芣_一。見_二古之聖王所以敬_二諸侯也_一。』と云へるは彼の吳延陵季札の魯に聘使えて周の樂を觀んことを請ひたるに依り『使_二工爲_二之歌_一。周南召南。曰。美哉。始基之矣。猶未也。然勤而不怨矣。爲_二之歌_一。邶鄘衛。曰。美哉。淵乎憂。而不困者也。吾聞衛康叔武公之德如_レ是。是其衛風乎。爲_二之歌_一。王曰。曰。美哉。思而不懼。其周之東乎。爲_二之歌_一。鄭曰。美哉。其細已甚。民弗堪也。是其先亡乎。爲_二之歌_一。齊曰。美哉。泱々乎。大風也哉。表_二東海_一者其太公乎。國未可量也。爲_二之歌_一。豳曰。美哉。蕩乎。樂而不淫。其周公之東乎。爲_二之歌_一。秦曰。此之謂_二夏聲_一。夫能夏則大。大之至也。其周之舊乎。爲_二之歌_一。魏曰。美哉。風々乎。大而婉。險而易行。以_二德輔_一此。則明主也。爲_二之歌_一。唐曰。思深哉。其有_二陶唐氏之遺民_一乎。不然。何憂之遠也。非_二令德之後_一。誰能若是。爲_二之歌_一。陳曰。國無_レ主。其能久乎。自_二鄘以下_一無譏焉。爲_二之歌_一。少雅曰。美哉。思而不貳。怨而不言。其周德之衰乎。猶有_二先王之遺民_一焉。爲_二之歌_一。大雅曰。廣哉。熙々乎。曲而有_二直軀_一。其文王之德乎。爲_二之歌_一。頌曰。至矣哉。直而不倨。曲而不屈。邇而不逼。遠而不攜。遷而不淫。復而不厭。哀而不愁。樂而不荒。用而不遺。廣而不宣。施而不費。取而不貪。處而不底。行而不流。五聲和。八風平。節有_二度_一。守

有序。盛德之所同也。見舞象前南_朝者曰。美哉。猶有憾。見舞大武者曰。美哉。周之盛也。其若此乎。見舞韶護_者曰。聖人之弘也。而猶有憾。聖人之難也。見舞大夏者曰。美哉。勤而不德。非禹其能修之。見舞韶箚_者曰。德至矣哉。大矣。如天之無不囑也。如地之無不載也。雖其盛德。其蔑以加於此矣。觀止矣。若有他樂。吾不敢請己。』と云へる、共に以て詩と史相關聯することの少なからざるを見るべきなり、而して詩を讀むもの亦必ず此眼識なかるべからず、後世遊戲閑適の題目生ずるに及びては、詩必ずしも盡く史に關すとも云ふべからず、雖も、猶ほ大家集中必ず數篇の詩史と稱すべきものなくんばあらず、古の詩に至りては其必ず史と關聯せざるもの殆んど稀なるが如し所謂爲情而造文ものと、爲文而造情ものとの以て別かるゝところも亦或は此に在らんか、

夫れ詩變を論せんとすれば、固より文學上攻究すべき要點とては其脉裁、工夫、系統の如き之を細論すべきは言を俟たすと雖も、文學は往々世の風潮に隨て波流を爲すものなり、或は世勢に先き立ちて却て世勢を誘導することもあり、之を要するに文學と時世とは乖離すべきらざるものなるを以て、文學の推移を論せんとすれば勢又世勢の現況に論及せざるべからず、抑も孔子が詩を讀み、季子が樂を觀て以て興感して時世の事實を覺知するは蓋し其未だ詩を讀み樂を觀ざるの前に在て先づ既に其事實を知れるなり、故に詩を讀み樂を觀るに當て興感すること深きのみ、詩を讀み樂を觀て而て後始めて事實を覺知せしにはあらざるべきなり、蓋し劇を觀るものは先づ脚本を讀んず、然らずんば當場演ずるところの事、徒らに是れ眼前の浮影、映去映來竟に何の興感かわらん、詩を讀むもの亦如是觀を爲すなり、是れ毛詩の序ある所以なるか、逸詩に至りては其れ何を以て之を明かにせん、

夫れ毛詩、逸詩と齊く是れ詩なるのみ、而して一は一たび孔子の刪存を経たるを以て之を経籍に加へられ、後儒の箋註屋上屋を架し、遂に之をして幽奧竊渺容易に解すべからざるものとなり、一は孔子の爲めに取られざる故を以て、人之を傳ふるもの少なく、諸書に散見するところを採撫て之を索ひるのみ、其顯晦如何ぞや固より孔子の取らざるところのものなるを以て完璧も亦甚だ罕なるべしと雖も、豈亦崑山の片玉なからんや、抑も卞璧の美を以て猶ほ玉人に知られず、吾寧ろ孔子刪餘の逸章に就て之を採擇せんと欲するなり、蓋し孔子の詩を刪るものは孔子が信ずるとあるの一の標準に由るのみ、故に歐陽脩曰く「刪去者、非止全篇、或篇刪其章、或章刪其句、或句刪其字、如唐棣、本小雅之詩、夫子謂其以室爲遠、害于兄弟之義、故篇刪其章也、衣錦尙絅、邶風君子偕老之詩也、夫子惡其盡飾之過、恐其流而不返、故章刪其句也、誰能秉國成、不自爲政、此大雅節南山之詩也、夫子以能字爲意之害、故句刪其字也」孔子の刪正したる標準は此類なり、孔子の之を爲すものは人の性情を持し風教を持する所以ならんか、然れども詩一道にあらざる、世益す進むに随つて端益す繁し、故に必ずしも概して一道を以て之を律すべからざるものあり、類に觸れて變ぜざるべからず、然るに眞西山曰く「古今人詩、吟諷用古多矣、斷烟平蕪、淒風澹月、荒寒蕭瑟之狀、讀者往往慨然以思、工則工矣、而於世道、未有三云補也。」是れ何ぞ膠柱の論なるや、詩固より世道を傷ふ人心を害ふべからずと雖も、詩は直ちに單純なる道德論にはあらざるなり、諷詠歌誦興觀群怨而して以て性情を鼓鑄し、而して以て世道人心を興感開導すへきなるのみ、況んや吟諷用古も亦聽者以て戒しむるに足る、豈必しも世道に補なしと謂ふべけんや、然れども性情正ならず辭氣眞ならずものは吾か知る所に非ざるなり、

詩固より一遵にあらす、王澤流れて而して詩作る、成功臻て而えて頌興る、徳勳立て而して銘著はる、嘉美終て而して諫集する、周禮既に六詩の目あり、類に觸れ端を發し、蔚興彬盛窮極なからんとす、古今の詩に就き時を以て論ずれば則ち

建安躰 黃初躰 正始躰 太康躰 元嘉躰 永明躰 齊梁躰 南北朝躰
唐初躰 盛唐躰 大歷躰 元和躰 晚唐躰 本願躰 元祐躰 江西派諸躰
人を以て論ずれば則ち

蘇李躰 冑劉躰 陶躰謝躰 徐庾躰 沈字体 陳拾遺躰 王楊盧駱躰

張曲江躰 少陵躰 太白躰 高適夫躰 孟浩然躰 岑嘉州躰 王右丞躰

韋蘇州躰 韓昌黎躰 柳子厚躰 韋柳躰 李長吉躰 李商隱躰 盧仝躰

白樂天躰 元白躰 杜牧之躰 張籍王建躰 賈浪仙躰 孟東野躰 杜荀鶴躰

東坡躰 山谷躰 后山躰 王荊公躰 邵康節躰 陳簡齋躰 楊誠齋躰

等あり、而えて又所謂

選 躰 柏梁躰 玉台躰 西崑躰 香奩躰 宮 躰

あり、而して詞章に属するもの作法に關するものには

古 詩 近 躰 絕 句 雜 言 三五七言 半五六言 一字至七字

三句之歌 兩句之歌 一句之歌 口 號 歌 行 樂 府 楚 詞

琴操謠 吟 詞 引 詠 曲 篇 唱 弄 長 調 短 調

四 聲 八 病 古詩一韻三用者 古詩一韻六七用者 古詩重用二十許韻者

古詩旁取六七許韻者 古詩全不押韻者 律詩至百五十韻者 律詩止三韻者

律詩徹首尾紂者 律詩徹首尾不紂者 後章字接前章者 四句通義者 絕句折腰者

八句折腰者 擬古 連句 集句 分題 分韻 用韻 和韻

借韻 協韻 今韻 古韻 古律 今律 領聯 頸聯

發端 落句 十字紂 十字句 十四字對 十四字句 扇對 借對 就句對

等の諸種あり、而して雜体には

風人 藁砧 五雜俎 兩頭纖々 盤中 迴文 反覆 離合

建除 字謎 人名 卦名 數名 藥名 州名 六甲十屬

藏頭歇後

等の類あり、是れ嚴滄浪の類舉するところにて、網羅して略ぼ漏らすことなきが如し、然れども亦必

ずしも遺漏なしと謂ふ可からず、

高楊張徐体 明初四家 何李体 何景明李夢陽 七才子体 前七子後七子 李長沙体 李東陽 公安体 竟陵体

是れ滄浪以後明代のみにても此諸体あり、細かに之を論すれば更に諸家の体ありて此に盡さざるなり、而して又雜体に在ても

四時詩 天隱詩 十二辰詩 六府詩 四色詩 道里名詩 一字至十字

郡縣名詩 郡名詩 縣名詩 姓名詩 百姓詩 十六人名詩 相名詩 鳥名詩

獸名詩 歌曲名詩 龜兆名詩 鍼穴名詩 將軍名詩 宮殿名詩 屋名詩

車名詩 船名詩 樹名詩 草名詩 八音詩 四聲詩 口字詩 藏頭詩

禽言詩

等は滄浪の擧げざるところなり、此類は層々として疊見すと雖も、遊戲文字に過ぎずして、竟に是れ正始に關することなし、之を知らざるも亦風人の旨に害あることなき、然れども亦詩を論せんとすれば之を外にして脱却し去るべからざるなり、然り而して世代の久しき作家の多き、到底臚學し盡くすべからざるものあらん、況んや吾の淺薄なる、知らざるところのものは蓋し之を闕如せんのみ、敢て漫りに臆說妄斷杜撰の論を弄ふは務めて之を避けん、且つ吾論及するところと雖も、多くは是れ一家の私言豈能く之を知れりと謂はんや、其定説の如きは來者の大成を待たんのみ、請ふ姑らく此に私言を將て之を識者に質さんか、

第一章

上 世

原 詩

第二章

周

第一變

第三章

漢

第二變

魏より以下六朝に在ては代を逐て詩風の變化ありと雖も、要するに小異同に過ぎず、唐以後は又一變を爲せり今姑らく漢以前を論述し魏より以下は更に他日を待ちて之を説述せん、

第一章

上 世

原 詩

嚴滄浪曰く『風雅頌既亡。一變而爲離騷。再變而爲西漢五言。三變而爲歌行雜體。四變而爲沈宋律詩。五言起於李駿蘇武。或云枚乘七言起於漢武柏梁。四言起於漢楚王傳韋孟。六言起於漢司豐谷永。三言起於晉夏侯湛。九言起於高貴鄉公。』と是れ詩の起源因革を論じたるものなれど、此論果して據信すべきか、蓋し古より詩を説くもの、詩原を云へば先づ風雅頌を指さし、三百篇を稱す、風雅頌三百篇は載せて經籍に在るを以て、詩を説くもの必ず之を以て圭臬と爲すは固より然るべきところなるべきと雖も、豈必ずしも三百篇よりも舊るべき詩なしと謂ふべけんや、汨々滔々とて三百篇の葩經成るまでには其以前に是れが源泉なくんばあらず、然ども亦邈邈悠遠殆んど信を致へがたし、或は佚して傳はらざるあり、或は好事者の擬製補作せるものあらん、然れども是れ亦妄斷勇割し去るに由しなし、其著見するところの書と其時世に對する他の比較上風格とに由りて之を商榷するに過ぎざるのみ、』上世の詩は唯志の之とてころのまゝ之を永言せるものにして、後世の如く初めより法格に羈拘するものにあらず、故に之を永言歌謠とて調子の諧はんことのみを目的とせるに過ぎざるべき、然れば素より五言七言の体制ある筈もなく、隨意に調子の諧ふまゝに放歌したるのみ是を以て調子の疾徐緩急に由りて句の長短卷舒之に隨て生ずるなり五字となれば五字、七字となれば七字、都合よき次第に任かせて毫も拘束することなかりまも、其創始またる新様に依て後人は之を步趨て各言各種の体も備はり生じたるなるべけれ、何事に由らず其始めて發生する時に、豫じめ先づ之が法格の備具するものは有らざるなり、總べて始めは自然に生じて、終りて人爲に成るものなり、詩も亦上世創始の時より既に聯律、韻法、句法、章法等の繁苛なる規律あるべき所以なきなり、体備はるに及んで法を生じ、法成るに及んで斯に上古創草朴質の氣は滅す、而て文物開進之百端繁興するに至りては規矩法

格の精嚴なるにあらずんば恐らくは鹵莽以て新奇と爲し怪僻以て巧妙と爲し、終に統一することなきに至らん、是れ猶ほ上世無爲の化を以て今の天下に襲用すべからざるが如きのみ、然れども始めなければ終りなし、故に終りを知らんと欲せば先づ其始めを知らざるべからず、夫れ昨非を知らざれば何ぞ以て今是を覺らん、詩人騷客の今体新調に通せんと欲するものは、必ず先づ古詩を討源せざるべからず、

詩の初め起れるは何の代なるやを詳かにすべからず、書契以後の事は多少文献の徴すべきものなきにあらずるを以て、之を知ることを得るも書契以前の事は當時の口碑傳稱のみに藉りて、書契起るに及び始めて之を記録せしに過ぎざるべし、故に固より其世代の詳を知るに由しなし、設令之を記するものあるも、亦何に由て據信すべけんや、然れども苟も之を記傳するものあれば、擧げて以て攷覈の資と爲さざるべからず、徒らに肚裡の陽秋を以て之を抹却し去るべけんや、蓋し按ずるに詩の最も舊なるもの、諸書に見るところのものは伏羲氏より舊なるはなし、夏侯玄の辨樂論に『伏羲氏因_レ時興_レ利。教_二民佃魚。天下歸_レ之。有_二網罟之歌。』と見えたる是れなり、此の網罟歌なるものは如何なるものなりしや、佚して傳はらざるは惜むべきなり、元來此の時は書契の未だ備らざる以前なるを以て、其傳はらざるは、亦已むを得ざるところなり、上世の所作に在りて、其辞章の傳はれるものは、伊耆氏（神農氏）を以て最舊るまゝと爲すべきが如し、禮記郊特性に『天子大_レ蜡八。伊耆氏始爲_レ蜡。蜡也者索也。歲十二月合_二聚萬物_一而索_二饗之_一也。』と見えたるところの、伊耆氏始めて蜡の祭を爲せし時に其年の成功を歲終に報じ、又來年の始めを祈らんとため、之を祝するの祝辭なりとて蔡邕獨斷、文心雕龍等に見ゆるものは、

伊耆氏蜡祝辭

土反其宅。水歸其壑。昆蟲母作。草木歸其澤。

土反其宅。水歸其壑。昆蟲母作。豐年若土。歲取千百。

是れなり、文心雕龍には其前章のみを採れり、此の祝辭にして果して神農氏の時のものなれば、先づ此の章を以て開古第一の古辭と爲さざるを得ず、其辭意周到にして天地の理に遵ひ、而して自から禱祝の意備はり、文辭古質なるも亦大に整ひたり、後世作るところの、四言、五言は早く既に此に發源するが如し、若し好奇家をして論せしむれば陶唐氏の擊壤歌、康衢謠より以下三百篇の四言は皆此に發せりと謂はん、況んや四言は韋孟に起れりとの説の如きは、殆んど半文錢の直なきに至るべし、然れども仔細に此の章を玩索熟誦すれば、其風調一に何ぞ漢人の口氣に似たるの甚だじきや、而して惡んぞ此の章は是れ竟に漢人蔡邕輩の擬作にあらざるなきを知らんや、抑も三憤五典八索九丘古來唯其目を傳ふるのみ、其書は則ち佚すと稱す、今に在て古の文を徵見すべきものは典謨より舊きはなま、詩の起るは固より文章より舊なるべしと雖も、書契の完備せずして當時の歴史さへ明かならざる時代なれば、詩ありまも佚して傳はらざりしこと亦知るべきのみ、漢人多く好奇にして、善く古の逸書を捕擬したるものあり、豈容易に據信すべけんや、然れども原詩を論せんには務めて之を擧ぐるの要あり、敢て慢りに私見を以て割斷し去ることを爲さざる所以なり、

神農氏の時に又豐年詠なる一篇ありしことは、夏侯太初の辨樂に『神農教民食穀。有豐年之詠。』と見えたるにても知るべし、然れども其詠辭は佚亡したり、又佚詩にては呂氏春秋に『葛天氏之樂。三人持牛尾。投足以歌。八闋。』とありて、其八闋とは

載 民 玄 鳥

遂草木

奮五穀

敬天常

達帝功

依地德

總万物之極

の八闕ありと云ふ、然れども、是れ亦佚亡して歌辭は知る能はず、而して此八闕の目も極めて疑はしきものあり、殊に敬天常の字の如きは、六經以後の文字にて眼を刺すを覺ふ、唯劉勰は『昔葛天氏樂辭。玄鳥在典。』と云へり、其辭は逸して傳はらざるのみ、

黃帝の時に至りては當時の辭章と稱するもの其數稍多と、『巾机銘』『巾几銘』『金華鼎銘』『彈歌』等ありて其辭章諸書に散見す、

巾机銘

無_レ掘_レ壑而附_レ丘。無_レ舍_レ本而治_レ末。日中必_レ慧。操_レ刀必_レ割。執_レ斧必_レ伐。日中不_レ慧。是謂_レ失_レ時。操_レ刀不_レ割。是謂_レ失_レ利。執_レ斧不_レ伐。賊人將_レ來。涓々不_レ塞。將_レ爲_レ江河。熒々不_レ救。炎々奈何。兩葉不_レ去。將_レ用_レ斧柯。

日中不_レ慧。是謂_レ失_レ時。操_レ刀不_レ割。失_レ利之期。執_レ斧不_レ伐。賊人將_レ來。涓々不_レ塞。將_レ爲_レ江河。熒々不_レ救。炎々奈何。兩葉不_レ去。將_レ用_レ斧柯。爲_レ虺弗摧。行將_レ爲_レ蛇。

是れ大公兵法に見ゆるところなり、而して賈長沙の博宏猶ほ之を取りて信じたるものなるにや、新書に『日中必慧。操_レ刀必割。』の二句を引て黃帝巾机銘なりと爲す、即ち漢書藝文志に見ゆるところの黃帝巾機銘是れなり、劉勰は『昔帝軒刻_レ與凡_レ以_レ弼_レ違。大禹勒_レ筍簠而招_レ諫。成湯盤孟。著_レ日新之規。』武王戸席。顯_レ必_レ戎之訓。周公慎_レ言於金人。仲尼革_レ容於歌器。則先聖鑒戒。其來久矣。』と云へり、是れ古來諸儒皆之を信じて疑ひを容れざりしものなるが如し、且つ古書に往々此銘中の語句を引用したるものあり、蓋し普通に傳はりて諺の如くになれるものなりしか知るべからずと雖も、銘の体に

於ては之を以て開古原始と爲すへし、(一書には後章の末の爲虺弗摧。行將爲蛇。の二句を前章の末に加へて一章と爲し分ちて二章と爲さるものあり、)然るに此の章と問題にて辭の異りたるもの更に二章あり

予居民上。搖々恐夕不_レ至_レ朝。惕々恐夕不_レ及_レ朝。競々慄々。日慎一日。人莫_レ躓_レ于_レ山。而躓_レ于_レ堙。

又路史に

母_レ兪_レ弱。母_レ倪_レ德。母_レ達_レ同。母_レ傲_レ禮。母_レ謀_レ非_レ德。母_レ犯_レ非_レ義。

の一章見えたり、虞嘉鼎錄に曰く、『金華山黃帝作_二一鼎。高一丈三尺。大如_二十石甕。像_二龍騰_レ雲。百神饗獸滿_二其中。複篆書_二三足。其文曰

眞金作_レ鼎。百神率_レ伏。

と、皆是れ黃帝の時の諸銘と稱す、何ぞ其文にえて而えて理なるや、又所謂彈歌なるものは

斷竹。續竹。飛土。逐兔。

是れ何ぞ其歌辭の奇古なるや、蓋し此の彈歌は吳越春秋に見ゆるところにして、『彈起_二千古之孝子。不_レ忍_二見_二父母爲_二禽獸所_レ食。故作_レ彈以守_レ之』とある是れなり而して劉勰は之を以て『黃歌斷竹。實之至也。』と評せり、然り實に古質なるものを求むれば古辭歌謠多しと雖も未だ此の彈歌に若くものはあらざるべし劉勰は又之を以て二言の始めとなし『尋_二二言。肇_二於_二黃世。竹彈之謠是也。』と云へり、勰は明かに此の歌を以つて黃帝の時のものと爲して疑はざりしものならん、其辭意の古質なるを見れば是れ或は黃帝の時の作なりと云ふも不可なからんか、然れども之を巾机銘に比すれば一は何

ぞ文藻にして、一は何ぞ野樸なるや、且つ夫れ一は四言六言の源を爲し、一は二言の始めと稱す、蓋ま四言の多く古に行はるゝ所以は、四言は之を口に歌詠して自のづから風調諸協勺齊にして疾聲促調に過ぎず、又緩聲曼調に流れず、自然に正音を得たるがためなるか、昔の摯虞は『雅音之韻。四言爲言。其餘雖備。曲折之体。而非詩之正也』。とまで論したり、是れは四言を以て雅正の音と爲せるなれども、自然音節の調子に於ても亦善く齊へるなり、二言に至りては最も促調急節を極む、蓋し此の詩の作られたる所以より視るも、其促調急節なるは其所なり、親の禽獸の食ふところと爲るを見るに忍びずして擊彈して之を守るの歌謠なれば、曼聲緩調に流れては意も亦切ならざるの感あるにあらずや、又黃帝の時の作と稱するものにまて其辭逸亡したるものは

龍哀頌 樂書ニ其目アリ

桐鼓曲十章 富藏啓筵、雲笈に見ゆ

震雷驚一 猛虎駭二 驚鳥擊三 龍媒蹀四

靈變吼五

鵬鶚爭六

壯士奮怒七

熊羆哮吼八 石蕩崖九 波盪壑十

波漳歌 黃帝伶倫をして夏に使せしむる作、水經注に見ゆ

等にまて、其辭章は考ふべきなま、莊子天運篇に

有姦氏頌

聽之不聞其聲。視之不見其形。克滿天地。苞裏六合。

の一章あれども恐らく莊子の寓言に作りたるものならん、其辭意の甚だ老莊一派の虛無主義に流れ、之を當時他の諸作の樸實深質の氣あるに比まて風調相似さるものあるを如何せん、

黃帝以後に在りては、寧封の『遊海詩』二章亦松子の大棗詩等あれども取るに足らず、少昊の時に皇娥歌、白帝歌の二篇あり、王子年拾遺記に曰く『少昊以金德王。母曰皇娥。處璇宮而夜織。或乘桴木而晝遊。經歷窮桑滄茫之浦。時有神童容貌絕俗。稱爲白帝之子。卽太白之精降乎水際。與皇娥讌戲。竝立撫桐峰梓瑟。皇娥倚瑟而清歌云々。白帝子答歌云云。及皇娥生少昊。號曰窮桑氏。』とあり、其歌は

皇娥歌

天清地曠浩茫々。万象迴薄化無方。滄天蕩々望滄々。乘桴輕漾著日傍。當期何所至窮桑。心知和樂悅未央。

白帝子歌

四維八埏眇難極。驅光逐影窮水一。璇宮夜靜當軒織。桐峯文梓千尋直。伐梓作器成琴瑟。清歌流暢樂難極。滄湄海浦來棲息。

是れ其事實既に小説に類す、其詩の信すべからざることを論を俟たず、其風格聲調より見るも斷えて周以前の作にあらずること明かなり、獨怪しむべきは王新城の詩學閼淵其識力も亦卓絶なる一世の大家にして、而して猶ほ且つ此の一章を其選するところの古詩選に收載せるは何ぞや、新城の學識を以て此歌の僞作なるを辨知する能はざると思はれざることなり、果せるかな其選詩に附記して『二歌出拾遺記。明係僞選。王子年苻秦時人。附錄未簡。』と云へり新城豈之を辨知せざるの人ならんや、之を斷じて僞選に係ると確言したるは新城の新城たる所以にして、彼れ亦隻眼を具すと謂ふべし、而して新城が之を選載して、渡易水歌、雉朝飛歌、獻王退怨歌等の後に置き漢詩の前に收めたる

は、或は之を秦代の詩として採れるものならんか、其作者は僞作なれども其詩は亦讀むに足る、新城が之を棄てざる瑕を以て瑜を棄てざるの意ならん、

淮南子、洛史に姁嫗氏の占詞なるもの四言四句の詞一章あり、又咸墨が九招歌なるものありて、文心雕龍にも『帝嚳之世。咸墨爲頌。以歌九招。』と云へる是れなり、然れども此の歌辭は逸まて存せず、唐堯、虞舜に至りては當時の文獻は二典等に由りて徴するに足るべく、堯舜の聖德を以て民に臨み、天下熙皞の化に浴し、其王澤は四表に光被し上下に格れるを以て、當時の詩豈一二の見るべきものなからんや、是れより以前は之れ有りと云ふと雖も、遼遠悠邈にして信を措き難し、司馬遷曰く『學者多稱五帝尙矣。然尙書獨載堯以來。而百家言黃帝。其文不難馴。薦紳先生難言之。』とは是れを以てなり、司馬遷が史記を書するの時に於て猶ほ且つ此の語あり、千載の下より之を明かにせんとす、其れ亦難いかな、

唐堯の詩にして先づ人の傳唱することろのものは、擊壤、康衢の二歌と爲す、蓋し謂ふ帝堯の世天下大に和し、百姓無事、八九十の老人ありて壤を撃て而して歌す是れ擊壤の歌なり、帝天下を治むること五十年、天下の治まるか治まらざるか、億兆の己れを戴くを願ふかを知らず、乃ち微服して康衢間に遊ぶ、童兒謠ふて云々す、堯喜び問ふて曰く、誰か爾をして此言を爲さしむるや、童兒曰く、之を大夫に聞けりと、大夫曰く古詩なりと、是れ所謂康衢謠なり、

擊壤歌

日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力於我何有哉。(末句或作帝力何有於我哉又作帝何力於我哉。)

康衢謠

立我烝民。莫匪爾極。不識不知。順帝之則。

自然の徳化に承順して識らず知らず其化と一たり、帝力の身に被ひるを忘る、皞々熙々の象あり、山靜日長復た人間にあらざるの氣あり、論者はこれを以て後の天保詩君を頌するの詞に『民之質矣。日用食飲。群黎百姓。偏爲爾徳。』の章は擊壤歌に本づけるなりとまで云へり、其詩の妙は攬擷し盡さざるものあり且つ帝力の一句は後世七言は此に濫觴し、四言は康衢に肇始せりと稱す、詩家直説に『塵史曰。王得仁謂。七言始於垓下歌。柏梁篇祖之。劉勰以交々黃鳥至於桑。爲七言之始。合兩句爲一。誤矣。大雅曰。維昔之富不如時。頌曰。學有緝熙於光明。此七言之始。王氏亦誤矣。蓋始於擊壤歌。帝力於我何有哉。頌之後。有南山歌。子產歌。採葛歌。婦歌。易水歌。皆有七言而未成篇。及大招百句。少招七十句。七言既盛於楚矣。』と又曰く『四言體。始於康衢歌。滄浪謂。起於韋孟。誤矣。』と見えたり、而して明の馮維訥は此の説を駁撃して曰く『諸家所論。七言詩始。惟垓下爲近之。他皆襍出。一。二言。未爲全体。至如露威扣牛所歌。高誘註國語。以爲頌風之詩。雖未必然。亦足以明南山白石之篇。誘時未嘗之也。他如列子擊壤孔子大道歌。續博物志。狄水歌。拾遺記。壽封子詩。皇娥歌。白帝子谷答。皆出於著書者之手。其文義各自爲體。而辭義深淺。居然有別。至吳越春秋所載。窮劫之曲。采葛婦歌。河梁之詩。尤淺劣不足道。而近時論者。遂引以爲據。辨七言不始於柏梁。亦何以稱知言也』と又四言體康衢歌に始まるの説を駁打して曰く『四言詩。三百五篇在前。而嚴云起於韋孟。蓋其叙事布詞。自爲一體。漢魏以來遞相師法。故云始於韋孟。非徒言也。或又引康衢以爲權輿。又鳥知康衢之謠。非列子因雅頌而爲之者邪。然明良五子之歌。載在典謨。可

微也』と、何ぞ其の説の然く紛々擾々たるや、而して諸儒の詩を論するもの多く此の擊壤康衢の二歌を引證せり、明の陳懋仁か梁の任彦升の文章緣起に『七言詩。漢武帝柏梁殿聯句。』と云へるに註して『周頌。學有緝熙於光明。七言之屬也。七言自詩騷外。柏梁以前。有皇娥帝子擊壤、箕山、大道、狄水、獲麟、南山、采葛歸、成人、易水諸歌。俱七言。或曰始於擊壤。或曰已肇南山。或曰起自垓下。然分戰國於助語。句体非全。惟少吳時皇娥。白帝二歌。勾踐時河梁歌。体具世遠。非其始乎。但悉見之後人書中。似出遠作之手。』と云へるは、大要維納の論し、然るに王新城が古詩選には、擊壤歌を卷首に收めて之を疑はす、其他の古詩を選するもの亦往々此の二詩を收採するものあるは何ぞや、彼の方密之の定本に係る古逸詩裁は多く逸詩の世に傳はらず人の疑ふて信せざるの篇を集載して、而して獨り此の二歌を採らず、是れ亦何の意ぞや、蓋し擊壤歌は列子、帝王世紀に見ゆるところにして、康衢謠も亦列子に出づ、是れ其出處甚だ據信するに足らず、殊に其歌の辭意を玩索すれば、漆園氏の所謂『忘足履之適也。忘要帶之適也。知忘是非一心之適也。』など云へる語氣と甚だ相近きを覺ゆ、竟に是れ列子一輩の寓言にはあらざるか、劉勰も文心雕龍に、明詩篇に於ては至堯有大唐之歌と云ひ、通變篇に於ては唐歌在昔則廣於黃世と云ふも擊壤康衢を云はず、是れ亦此の二歌を取らざるが故ならんか、然りと雖も其辭章の妙は吾豈敢て之を間然せんや、古今選詩家の之を採る所以は、唯其辭章の妙を以てのみ、今強いて時代に拘牽して之を可否するは、蓬之心あるかなと云はるれば、則ち復た何をか言はん、

擊壤康衢二歌の外に唐世の作と稱するもの猶は數篇あり、而して帝堯の作れりと云ふ神人暢なる一章あり、

神人暢

清唐穆分承予宗。伯僚肅兮子寢堂。禱禱進福求年豐。有誤在坐勅予爲害在玄中。欽哉
皓天德不隆。承命任禹。寫中宮。

載せて古今樂錄に在り、志説に曰く『堯郊天地祭神座上有響誨堯曰。水方至爲害命子救之堯乃
作歌』と何ぞ其事の荒唐なるや然して謝希逸か琴論にも『神人暢。堯帝所作。』と云へり、是れ何の
據るところありて而して此説を爲すや、蓋し此の章は琴歌の一種にして、琴曲の和樂して而して作
るもの之を命じて暢と曰ひ、憂愁して而して作くるもの之を命じて操と云ふと、此の説風俗通に見ゆ
るところなり然れば此の章も琴操として美曲家の傳ふところなるのみ、唯其辭章は古奥雅莊にし
て稍や曲謨の遺意ありて風誦すべきに足る、

古今樂錄に又許由が箕山歌なるものを載す、

箕山歌

登彼箕山兮。瞻望天下。山川麗崎。萬物還普。日月運照。靡不記睹。游放其間。何所却慮。
歎彼唐堯。獨自愁苦。勞心九州。憂勤后土。謂予欽明。傳禪易祖。我樂何如。蓋不盼顧。河水流兮。
緣高山。甘瓜施兮。葉綿蠻。高林肅兮。相錯連。居此之處。傲堯君。

夫れ許由なるものは眞に果して其人ありしか、司馬遷曰く『堯讓天下於許由。許由不受。耻之逃隱。
及夏之時。有卞隨務光者。此何以稱焉。大史公曰。余登箕山。其上蓋有許由冢云』と司馬遷豈其人
あるを信ぜざるか、蓋し許由の事は莊周始めて之を説くのみ、其他古書に徴すべきものあることな
し、皇甫謐か高士傳に『許由字武仲。堯聞致天下。而讓焉。乃退而遁於中嶽潁水之陽箕山之下。隱。堯

又召爲九州長。由不_レ欲聞_レ之。洗_二耳於潁水濱_一。時有_二巢父_一。牽_二犢欲_レ飲_レ之。見_二由洗_レ耳_一。問_二其故_一。對曰。堯欲_二召_レ我爲_二九州長_一。惡_レ聞_二其聲_一。是故洗_レ耳。巢父曰。子若處_二高岸深谷_一。人道不通。誰能見_レ子。子故浮游。欲_二聞_二求其名譽_一。汚_二吾犢口_一。牽_二犢上流_一。飲_レ之。許由歿。葬_二此山_一。亦名_二許由山_一。在_二洛州陽城縣南十三里_一。』と云へる是れなり、而して此の事後儒多く之を疑ふて信せず、博物志には司馬遷の言なりと稱して『無_レ堯以_二天下_一。讓_二許由_一。事_上』との斷言を爲し、楊雄も亦之を以て『誇大者爲_レ之』と論破し去りたり、許由が事は蓋し信を考ふるに由しなし、況んや其詩をや、

莊子に贅缺（堯の師なりと云ふ）道を其被衣なるものに問へる時、被衣の歌なりとて、

形若_二稿骸_一。心若_二死灰_一。眞其實知。不_二以_レ故自持_一。媒々晦々。無心而不_レ可_二與謀_一。彼何人哉。

の一章あり、辭章は一種の古趣ありて味ふべし、其他に王子年拾遺記に、方回（劉向の列仙傳に方回は堯の時の隱人なりと見ゆ）が遊南岳讚と稱する一章あり、

珠塵圓潔。輕旦明。有道服_レ之得_二長生_一。

此の章の如きは、意淺く語平弱にして見るに足らず、復た何ぞ其眞僞を問ふに遑あらんや、嗚呼唐世の詩竟に一首の取て以て論據と爲すべきものなしか、唐世且つ然り、況んや黃世に於てをや、姑らく疑ひを存して以て他日の考定を待たんのみ、

虞舜に至りては之を陶唐氏に比すれば稍文獻の徵すべきあるを以て、此以後の詩は信を措くべきものなくんばあらず、古詩の後世に傳存せるものに就て、詩原を探究せんと欲すれば、黃唐既に彼の如し、自ら之を有虞氏以下に求めざるべからず、有虞時代の詩と稱するもの亦數章に下らずと雖も、舜帝と皐陶との廣和の歌を以て尤も信すべきものとなすべきか如し、虞書に『帝庸作_レ歌曰。勅_二天之命_一。

惟時惟幾。乃歌曰。』

股肱喜哉。元首起哉。百工熙哉。

『皋陶拜手稽颡言曰。念哉。率作興事。慎乃憲。欽哉。屢省乃成。欽哉。乃賡載歌曰。』

元首明哉。股肱良哉。庶事康哉。

（又歌曰）

元首叢脞哉。股肱惰哉。万事墮哉。

此の三章は實に虞和の元始にして、後世一唱一和の詩盛んに起るも皆此に發源せざるはなま、帝舜の治功は書史載するところを見るも赫々とまて火を覩るが如し、皋陶との賡歌を見るも、其勵精責善以て治を圖るの意ありて、而かも君臣の遇合水魚の如く、和氣洋洋の中に大經綸を計畫し去りて、君は臣を率ゐる臣は君を輔け、君臣の間と雖も苟も昌言あれば之を拜す、有虞氏の聖化治功の偶然にあらざるを知るなり、此詩三章とも四言に、て後章の首句のみ五言たり、而して三句を以て章を成す、古味古趣掬すべきものあり、是れこそ四言五言の發端なりと謂ふへし、而えて毎句必ず、哉字の語助あり、故に助字を去りて論すれば三言も亦此より濫觴すとも稱すへきか其韻法の第一章は平上二聲の支、紙韻を混用し、第二章は陽庚二韻を通用したるは、古韻にして固より異しむるに足らず、而して第三章は哿の一韻を押す、最も穩諧なり、

（未完）